

クイーンズ・イングリッシュ への裏道

経営学部
安藤 聡

かなり昔の話だが、暮れも押し迫ったある晩を友人宅で無為に過ごしていた時のこと、見るとはなしに見ていたテレビではエリザベス女王が恒例のスピーチを行っていた。すると唐突に、友人が耳を疑うような台詞を吐いた。曰く、「この人、英語ヘタだな」と。私はまずどこから反論したらよいのかさえわからず、言葉を失うばかりだった。いいか、この人の英語こそが文字通りの「クイーンズ・イングリッシュ」であり、いやそもそもクイーンズ・イングリッシュ、あるいはキングズ・イングリッシュとは・・・と説明しようかとも思ったのだが、私はそれも面倒に思えて、ただ一言、「お前、面白いこと言うなあ」と呟いただけだった。

だがよく考えてみれば、この友人の言いたいこともわからないわけではない。とくに英語に関しての知識を持たない普通の日本人にとっては、米国の（それも西海岸あたりの）方言こそが「英語らしい英語」であり、それは母音の後のアールの音を必要以上に舌を巻いて捻り出し、あるいは‘Japan’を「ジェアペア～ン」などと、‘water’を「ウワラ～」などと発音するような、カギカッコ付きの「英語」なのである。たとえば‘twenty’を「トゥエンティ」とちゃんと発音するのは日本人のカタカナ英語のようであり、「トゥエニー」というのが「英語らしくて」「格好いい」と思っている日本人は少なくない。聞いた話だがある米国企業の日本支社では、コピーのことを「カピー」

と称しているという。こんなのを英語らしい英語だと思われた日には、シェイクスピアやジェームズ一世やBBCアナウンサーやオクスフォード大学出版局、それに何と云ってもエリザベス女王の立場がない。元来の「標準的な」英語は「原則として」スペリング通りにひとつひとつの音をはっきりと発音するのである。こういう英語なら世界中（少なくとも英語が通じる国であれば）どこへ行っても立派に通用し、尊敬される。しかしこのような発音が結果的に、くだんの友人をはじめとする多くの日本人には「英語らしくない英語」に聞こえてしまうのであろう。と、このように大上段に構えて偉そうに解説している私自身も、中学高校時代に習った「英語の」教科書はほぼ米語一辺倒であり、大学時代にはミシガン・メソッドによるLLの授業を受けていたので、ある時期までは米語こそが本物の英語だと信じて疑わなかったのだ。だからエリザベス女王の英語を「ヘタだ」と称する友人の言わんとするところもわからなくはないのである。

クイーンズ・イングリッシュがある種のカタカナ英語のように聞こえるということは、逆に言えば、日本人のカタカナ英語にいくらかの「改良」を加えればクイーンズ・イングリッシュに近い立派な英語になる、ということになる。米語を英語らしい英語と勘違いしつつも、多くの日本人は「クイーンズ・イングリッシュ」という響きにある種の憧れを抱いている。それならばカタカナ英語の特性を逆に活かしてクイーンズ・イングリッシュに近づいてしまおうではないか。なお、私たち日本人が英語を話す場合、英国人（それも標準語を話す英国人）とまったく同じ発音をすることは不可能だし、またそうする必要もない。むしろ英語の発音に日本人らしさを残した方が望ましいという考え方が最近では主流になって来た。一方で子音エルとアールの混同に代表されるように、日本式カタカナ英語は思わぬ誤解を招くこともある。ここで私が提起するのは、最低限の子音の発音だけ英語らしくなるよう練習して、あとはカタカナ英語で代用するという方法である。これによ

て、もちろん完全にではないが結果的に割と「本物」に近い英語を話すことが可能になり、諸外国で立派に通じてしかも尊敬されるというおまげがついて来るのである。

「クイーンズ・イングリッシュ」というのは、ほぼ「標準英語」（いわゆるRP）と同義と考えてよい。このような英語に近づくために、まずは「f, l, r, th, v」の六つの子音の発音を練習する必要がある。五つしかないじゃないか、と言わないように。「th」には無声音（throwとかbreathなどの場合）と有声音（thisとかbreatheなど）がある。ただしこれら六つだけでは十分ではない。「b, d, m, n, p, t」が語尾に来る場合のために、これらの子音も練習しておく必要がある。たとえば‘cut’は「カット」ではなく「カッt」でなければならない。なぜなら「カット」と言うと語尾の‘t’の後に「オ」という母音が入ることになる。それなら他にも語尾の「k」や「s」などは練習しなくてよいのか、という疑問もあろうが、これらは必要ない。たとえば「駅まで歩く」と「私は学生です」を、それぞれ声に出して読んでみてほしい。たいていの人最後の「く」と「す」を「k」、「s」と母音を伴わずに無声音の子音だけで発音しているであろう。（ただし関西方言ではこれらを文字通り「ku」、「su」と発音する傾向がある。だから関西弁ネイティブの人はこれらも練習するように。）それからこの六通りの語尾の子音の後に「s」がつく場合（つまり複数形や三単現の場合）も押さえておく必要がある。

子音「f」は「無声唇歯擦音」といって、下唇の内側を上の前歯で軽く噛んで、声帯を使わずに息だけで音を出す。この「f」を有声音にしたのが「v」（有聲唇歯擦音）である。「l」（有聲歯茎側流音）は舌の先を歯茎（上前歯の付け根あたり）に当てて声帯を使って発音する。一方で「r」（有聲歯茎流音）は唇をすばめて舌先と歯茎の間で発音する。日本語のラ行の子音の前に小さく「ウ」の音（ワ行の子音のような音）があると考えればよい。「l」と「r」を区別する練習方法をひとつ紹介しておこう。用意するものはティッシュペイ

パーを一枚。たいていは二枚で一組になっているから、剥がして一枚にした方が使いやすい。この一枚のティッシュペーパーの端を軽くつまんで、自分の鼻に当てて口の前に垂らす。そして、「lice / rice」でも「light / right (write)」でも何でもよいから「l」と「r」で対になっている単語を発音する。この時に、「l」を発音する瞬間にはティッシュペーパーが動いてはいけない。「r」では逆に動かなければいけない。というわけで「l」と「r」の発音を身につけたら次は「th」である。これはまず舌の先端を上下の前歯で軽く噛む。そして声帯を使わずに息だけで発音するのが無声歯擦音の「th」、声帯を使うのが有聲歯擦音の「th」である。

語尾の子音はまず「b」と「p」から練習しよう。いずれも唇を閉じた状態から破裂させるように息を押し出して発音するが、この時に声を出すのが「b」（有聲両唇閉鎖音）、出さないのが「p」（無聲両唇閉鎖音）である。有聲歯茎閉鎖音「d」と無聲歯茎閉鎖音「t」は先ほどの「l」の時と同様、舌の先を上歯茎に当てて、その位置で息を破裂させて発音する。有聲両唇鼻音「m」は唇を閉じたまま声帯を使って発音する。（ちなみに、この子音は幼児が最初に覚える子音であり、したがってすべての言語において「母親」と「食べ物」を意味する幼児語は「m」の子音で始まる。）有聲歯茎鼻音「n」は舌の先端を「l」や「d」と「t」の時と同じく上前歯の付け根に当て、唇を少し開いた状態で声を出す。日本語の「ン」というよりは「ンヌ」に近い音になる。舌先をこの位置に当てていないと、たとえば現在分詞（～ing）の語尾のような「ング」という音（有聲軟口蓋鼻音）になってしまうので注意されたい。

これら以外の音はたいてい日本語の五十音のどれかで代用できる。あとはそれぞれの単語の強勢（いわゆる「アクセント」のことだが、英語ではこういう場合‘stress’という）と、センテンスの中でどの語が強く発音されるかということを知っておけば完璧だ。というわけでこの原稿もここで終わってしまってもよいのだが、せっかくだからシェイクスピアのソネット（十四行詩）を使って実際

に発音練習をしてみよう。語尾の子音をカタカナで表記している語については、その子音の後に母音を介在させないように注意されたい。太字は強勢を表すが、韻律よりも意味を優先した箇所があることをお断りしておく。

Who will believe my verse in time to come.

フー・ウィ^l・ビ^lイー^v・マイ・^vアース・イン・
タイ^m・トゥ・カ^m

(誰が私の詩を信じるだろうか、来たるべき未来に)

If it were filled with your most high deserts? --

イフ・イ^t・ワー・フイ^ld・ウィth・ヨー・モウst・
ハイ・デザー^tツ

(たとえこの詩でどんなに君を賛美したとしても)

Though yet, heaven knows, it is but as a tomb

thオウ・イ^エt・ヘ^{vn}・ノウズ・イ^t・イズ・バ^t・
アズ・ア・トゥー^m

(それでも、確かに、この詩は墓石のようなものに過ぎない)

Which hides your life, and shows not half your parts.

ウィッチ・ハイ^{ds}・ヨー・^lアイフ・アンド・シヨ
ウズ・ノ^t・ハー^f・ヨー・パー^tツ

(この詩は君の生涯を隠匿し、その半分も示すことが出来ない)

If I could write the beauty of your eyes

イフ・アイ・ク^d・^rアイ^t・thア・ビュー^{ティ}・
オ^v・ヨー^rアイズ

(もし私が君の瞳の美しさを書くことが出来たととしても)

And in fresh numbers number all your graces,

アンド・イン・フ^rエシュ・ナンバーズ・ナンバー・
オー^l・ヨー・グ^rエイ^スイズ

(そして拙い一連の詩の中で君の美を数え尽くしたとしても)

The age to come would say This poet lies;

thイ・エイ^ジ・トゥ・カ^m・ウ^d・セイ・thイ^s・
ポエ^t・^lアイズ

(未来の世代は言うだろう、「この詩人は嘘吐

きだ)

such heavenly touches ne'er touched earthly faces.'

サッチ・ヘ^{vn}ン^lイ・タッチ^{イズ}・ネア・タッチ
t・アーthl^lイ・フェイ^スイズ

(天上の筆致で地上の顔を描けるわけがない)と)

So should my papers, yellowed with their age,

ソウ・シュ^d・マイ・ペイ^{パーズ}・イ^エlオウ^d・
ウィth・thエア^rエイ^ジ

(それゆえ私の原稿は、時を経て黄ばみ、)

Be scorned, like old men of less truth than tongue,

ビー・スコnd・^lアイク・オウ^{ld}・メⁿ・オ^v・
^lエ^s・trウーth・thアン・トン^g

(軽蔑されるだろう、まるで口先だけの嘘吐き老人のようだと、)

And your true rights be termed a poet's rage

アンド・ヨー・trウー^rアイ^ツ・ビー・ター^{md}・
ア・ポエ^ツ・^rエイ^ジ

(そして君への正統な賛辞も詩人の狂気と称され、)

And stretched metre of an antique song.

アンド・strエッチ^t・ミー^{ター}・オ^v・アン・アン
ティーク・ソⁿg

(また古くさい歌に特有の誇張された韻律と称されるだろう。)

But were some child of yours alive that time,

バ^t・ワー・サ^m・チャイ^{ld}・オ^v・ヨーズ・ア^l
アイ^v・thア^t・タイ^m

(だがもしその時君の子供が生きていたら、)

You should live twice: in it, and in my rhyme.

ユー・シュ^d・^lイ^v・^tワイ^s・イン・イ^t・アンド・
イン・マイ・^rアイ^m

(君もまた生きるだろう、その子の中に、そして私の詩の中に。)

これはソネットの第十七番である。(シェイクスピアはソネットにタイトルを付けていないので、ソネットはすべて番号で呼ばれる。) 詩人がある「美しい人」に向かって、「私の詩でいくら君の美しさを讃えても未来の人々には信じてもらえない。

だから早く結婚して子をつくり、君の美（の証拠）を未来に残しなさい。そうすれば君の美も私の詩も生き続けることになる」と言っているのである。だが、この「君」というのが実はある名家の若い男である、という事実はシェイクスピア研究家の間ではすでに常識となっている。それが実際に誰なのかについては二説あるが。

それはともかく、自分の英語をクイーンズ・イングリッシュらしくするもうひとつのコツを伝授しよう。それは 'stiff upper-lip' である。これは文字通りには「堅い上唇」あるいは「堅い鼻の下」（upper-lip は上唇の粘膜の部分だけでなく、鼻と口の間の部分をも含む）という意味だが、転じて感情が顔に出ないイングランド人の性質を表すイディオムとして使われる。ここで言うのはイディオムの方ではなく文字通りの意味の方であり、実際アップパー・ミドル・クラス以上のイングランド人が英語を話すときには上唇と鼻の下があまり動かない。これを真似して上唇と鼻の下をあまり動かさずに発音すると、あるいはあまり口を大きく開けずにポソポソと呟くように発音すると、より「本物」らしい英語に聞こえるようだ。

2006年度より 仏検に準2級新設

経営学部

田川 光照

実用フランス語技能検定試験、通称「仏検」に
来年度より準2級が新設されることになった。

2005年度まで、仏検の級分けは下から5級、4級、3級、2級、準1級、1級という6つの級に分けられてきたが、ここで問題だったのは、3級と2級との間でのギャップであった。仏検のパンフレットで、3級と2級について次のように説明されている。

3級：「基本的なフランス語を理解し、簡単なフランス語を聞き、話し、読み、書くことができる。学習200時間以上（大学の2年修了程度。一部高校生も対象となる）。」

2級：「日常生活や普通の職場で必要なフランス語を理解し、特に口頭で表現できる。学習400時間以上（4年制大学のフランス語専門課程4年程度で、読む力ばかりでなく、聞き、話し、ある程度書く力も要求される）。」

この説明からも分かるように、3級は、フランス語を専門的に学習するわけではない学生でも2年間まじめに勉強すれば合格可能であるのに対して、2級は、そのような学生にはとうてい手の届くものではない。実際、これまで本学名古屋校舎の学生で3級をとる人は時々いるが、2級をとった人はひとりもいない。名古屋校舎のカリキュラムでは「フランス語上級」が設けられているとはいえ、それを3年次と4年次の2年間受講したとしても、2級はまず無理である。

この3級と2級とのギャップは、仏検全体の出